



[野菜部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

5. 雨除け栽培トマトの放射状裂果軽減のためのフルメット液剤のがく隙間散布

[要約]

ハンドスプレーを用いたフルメット液剤の散布は、がくと幼果の隙間に薬液が保持されるように行うことで、0.5ml/果の少量の処理でも放射状裂果の軽減効果が安定する。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 野菜・花研究室

[連絡先] 電話 086-955-0277

[分類] 情報

[背景・ねらい]

トマトの雨除け栽培では、夏季に放射状裂果が発生して、等級落ちあるいは廃棄を招いている。これまでに、サイトカイニン活性を示す植物調節剤であるフルメット液剤を、幼果期（果房第1果の果実径が3～4cm大を目安）に1果房当たり1回散布することで、放射状裂果が減少し、可販収量が増加することを明らかにした。しかし、散布量が多いと農薬費が高くなる。そこで、少ない液量で放射状裂果の軽減効果が安定する散布部位を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

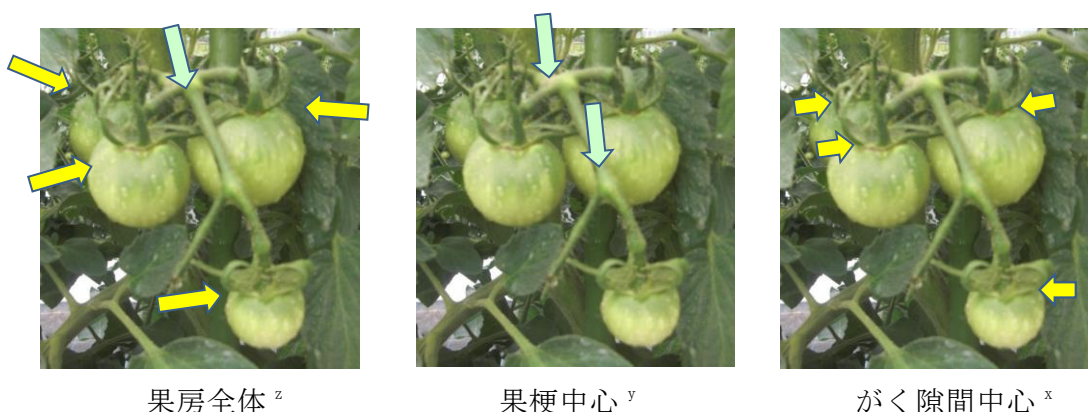
1. 果梗部をねらった散布と果実上部への散布を併用すると（図1左）、くず放射状裂果が減少する（図2）。
2. フルメット液剤を主に果梗部にのみ散布した場合（図1中央）、等級落ちまたはくず放射状裂果ともに明瞭な軽減効果は認められない（図2）。
3. 一方、主のがくと幼果の隙間への散布により（図1右）、少ない処理量でも等級落ち及びくず放射状裂果が減少し、明瞭な軽減効果が得られる（図2）。

[成果の活用面・留意点]

1. フルメット液剤による放射状裂果の軽減効果は栽培条件によって異なる。
2. 極端な高温条件で散布すると、果頂部の過剰な薬液が残存した部位で、収穫時に着色遅れや白斑症状の薬害が発生することがあるので、午後の気温が低下していく時間帯に処理する。
3. 本試験は「ダイヤスプレーロングピストル（楸フルプラ）」を使用した結果である。



[具体的データ]



果房全体^z

果梗中心^y

がく隙間中心^x

図 1 ハンドスプレーによるフルメット液剤の散布方法のイメージ

^z 果房全体：主に果梗部に果房当たり約 1～2 ml と果実上部に約 1 ml/果を散布

^y 果梗中心：主に果梗部に果房当たり約 2 ml を散布

^x がく隙間中心：各果実のがくと幼果の隙間に薬液が保水されるように約 0.5ml/果を散布

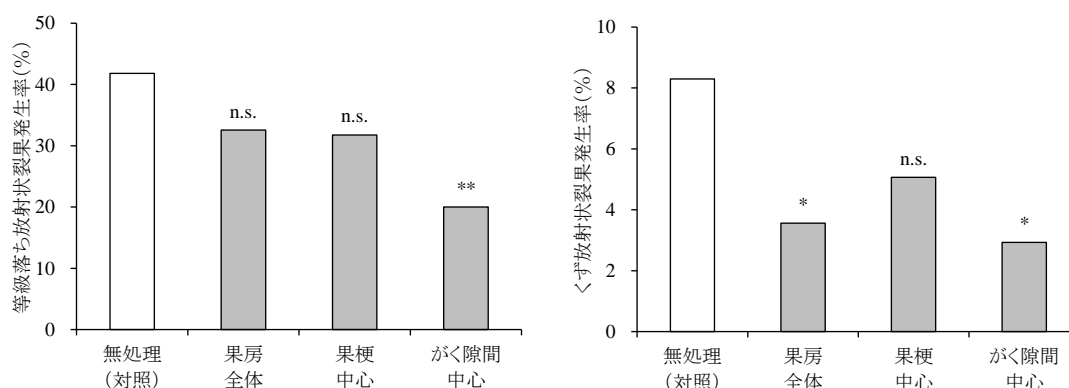


図 2 フルメット液剤の処理方法が等級落ちあるいはくず放射状裂果発生率に及ぼす影響

注) 「桃太郎 8」を 5 段階摘心、直立仕立てで隔離床養液栽培

20ppm 液を第 1～4 果房に処理

1 区 4 株、4 区のアークサイン変換後の値を用いて、ダネットの多重比較検定

*は 5%、**は 1%水準で対照の無処理区との間に有意差があることを示す

[その他]

研究課題名：良果率向上によるトマト高品質・多収栽培管理技術の開発および実証

予算区分：受託（戦略的イノベーション創造プログラム（次世代農林水産業創造技術）

「収量や成分を自在にコントロールできる太陽光型植物工場」)

研究期間：2014～2018 年度

研究担当者：佐野大樹、飛川光治

関連情報等：1) [平成 27 年度試験研究主要成果、75-76](#)

2) [平成 28 年度試験研究主要成果、53-54](#)

3) 佐野ら(2018)園芸学研究、17:87-93